

# 職人の手による、新しい伝統づくり

安比川流域の漆器生産の伝統を今に伝える安比塗。上質な漆器を生み出すため、試行錯誤を繰り返して生まれました。

## 「永遠の定番」を目指して

安比塗の製作には、岩手県工業試験場(現・県工業技術センター)が深く関わり、漆本来の特性を生かした技法を確立しました。

木地は、ミズメザクラやトチなど、すべて天然木を使用し、木を縦に切って木取りしています。縦木取りは、大きく太い木が必要で、加工が難しいものの、丈夫で割れにくく、ゆがみの少ない器を作ることができます。

お椀などの原型は、地域に残された古い椀などを計測して平均化し、いい部分をかけ合わせて作り直しました。シンプルで、軽くて使いやすく、現代の暮らしにもすんなり溶け込み、長く使うことで経年変化の深みが増します。伝統と洗練を掛け合わせ、食卓の「永遠の定番」を目指しています。



## 研究から生まれた最適な工程

浅沢地区の塗りの伝統を今に伝える安比塗。一番のこだわりは何といても、漆にあります。

漆本来の特性を生かすため、地域に伝わる技術を数値化して客観的に分析し、最適な漆の精製技術、塗りの回数などを編み出しました。漆の精製の仕方により、光沢や粘度が変わり、仕上がりに影響が出るため、漆は全て自社精製。貴重な岩手県産漆を使用し、鮮やかな発色と丈夫さを生かしています。

塗り手法の大きな特長は、下地から上塗りまで、良質な漆を塗り重ねる回数などを編み出しました。漆の精製の仕方により、光沢や粘度が変わり、仕上がりに影響が出るため、漆は全て自社精製。貴重な岩手県産漆を使用し、鮮やかな発色と丈夫さを生かしています。

ねる「漆下地」。漆は時間がたつにつれ硬くなる性質があるので、木地に漆をたっぷり染み込ませ、漆を何度も塗り重ねることで、丈夫な器を仕立てます。

上質な漆器を生み出すために、度重なる分析と実践を経て誕生した安比塗。信頼の技術は、将来にわたり安心してお使いいただける漆器の証です。およそ52工程、すべて職人の手仕事で仕上げます。

## 時間をかけて、艶を育てる器

熟練の技術が求められる上塗り

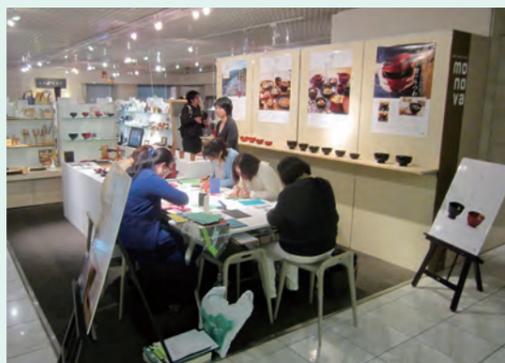
は、限られた職人が専用の部屋で行います。「塗り立て」と呼ばれる仕上げの手法により、漆そのものの質感が際立つ、安比塗独特の奥ゆかしい輝きが生まれます。毎日使い込むことで表面が磨かれ、漆がさらに硬くなって、やがて美しい艶のある器へと育つのです。

長年使い込まれて漆器の艶が増すことを、「艶があがる」といいます。毎日の暮らしの中で、ゆっくりと輝きが育つ安比塗。日々の思い出とともに艶をまとい、使う人にとっての「特別な器」となります。



市役所新庁舎の市長室のテーブルは、安比塗漆器工房製。一枚板を拭き漆で仕上げた、格調高い特注品

## 全国各地で展示会を開催



「monova」で開催されたワークショップの様子。こし紙を使って、絵が飛び出るポップアップカードを作りました

安比塗漆器工房では、趣向を凝らした展示会を行い、着実にファンを広げています。

昨年12月4日から16日まで、東京都新宿区の伝統工芸品ギャラリー「monova」で、「安比塗のうつわ展」を開催。漆を精製する時に使う「こし紙」を活用したワークショップを併催し、安比塗の魅力を感じていただきました。

ことし1月には、同中央区銀座にある岩手のアンテナショップ「いわて銀河プラザ」で、「わしの尾」の酒とともに楽しむ「ぬぐだまるいわて酒とうつわの手仕事展」に出展。全国各地の有名パートの催事などにも出展し、高い評価を得ています。

## 職人技を支えるセンター

安比川流域の漆器文化を継承するため、昭和58年に開設した安代漆工技術研究センター。2年間で、漆器に関する実践的な指導を行い、漆器職人を育成しています。漆芸家を目指す若手のための貴重な研修機関であり、理論的な指導法とその教育水準が高く評価されています。開業以来、60人の卒業生が、漆器職人として県内外で活躍しています。

安比塗漆器工房の塗師の多くは、このセンターの卒業生。センターの指導者と連携しながら、日々技術の研さんに励み、アフターサービスの対応や特注品の製作など、幅広いニーズに対応しています。



安代漆工技術研究センターでの研修の様子



## 「艶があがる」とは？

新品の安比塗には表面に非常に細かな凹凸があり、真珠のような柔らかな質感があります。毎日使い続けていくことで、鏡のような光沢が生まれてきます。溜塗りの漆器の場合、上塗りが徐々に薄くなり、茶色みを帯びてくる点も魅力です。



新品の安比塗



長年使用した安比塗